

西園寺公一著

釣魚迷

—私の履歴—



岩波新書

616



西園寺公一著

釣 魚 迷

—私 の 履 歴—

岩 波 新 書

616

西園寺公一

1906年東京に生まれる

1930年英国オックスフォード大学卒業

専攻—政治経済

現在—日本中国文化交流協会常任理事，
アジア・太平洋地域平和連絡委
員会副秘書長，世界平和評議会
評議員

著書—「貴族の退場」「北京の八木節」

釣魚迷

岩波新書(青版) 616

1966年12月20日 第1刷発行 ©



著者 さい おん じ きん かず
西園寺公一

東京都千代田区神田一ツ橋2-3

発行者 岩波雄二郎

長野市中御所2-30

印刷者 田中 忠

発行所 東京都千代田区 株式会社 岩波書店
神田一ツ橋2-3

落丁本・乱丁本はお取替いたします

大日本法令 印刷・製本

目次

1	釣竿の持ちはじめ	1
2	スコットランドのグリルス釣り	7
3	赤道の海のピクニック ——ポナペ離島の根魚釣り——	25
4	奥日光の鱒釣り ——名人勘藏の思い出——	43
	ねばり勝ち	44
	金胡麻・銀胡麻	52

5 真鶴と伊豆の磯釣り・舟釣り……………61

富戸ふとの寒舞鯛かんぶだい 62

蘭童とアカヤガラ 66

黒崎の黒鯛釣り 70

牛うしの糞くその太平記 75

6 北海道釣り行脚……………83

阿寒湖のアメマス 84

然別湖しかりべつのミヤベイワナ 97

西別川のイトウ 104

7 オーストリアの鱒川……………113

ソ連兵の釣りと米兵の釣り 114

グレーリングと監視員ブルター 117

ジョルジの犯罪 125

エルラウフ川のナチ 137

8 ニジマス 虹鱒の抗議 149

9 中国編 153

外道^{げどう}釣り 154

——昆明湖の巻狩り——

釣り^{つり}きちがい 釣魚迷の「人民公社反対論」 158

草^{ツアオ}魚^{ユイ}迷^ミ 165

——暁の遊撃隊員——

武漢の釣り 174

——鮒^{フナ}のドブ釣りと朱さんの青魚第一号——

杭州の釣り 186

— 食道楽と草魚の大釣り —

広東の釣り 194

— 星湖^{シンフー}の鯪魚^{ロシマ} —

広東の釣り 202

— 天湖^{ティエンフー}の草魚 —

あとがき 211

1

釣竿の持ちはじめ

朝ご飯がすむと、パパは、オジサマと出かけていく。ボクたちは待たされる。待遠しいので、ボクは、ジローと取っ組み合いをしたりして騒ぐ。ジローはボクの弟だが、年子で、身体はボクより大きいくらいだから、取っ組み合いでは、ボクがよく負かされる。癪ッたらない。

「ベコ！ ジロー！」ママが呼ぶ。待ちかねていたボクたちは、飛んでいく。ママが一つずつ紙包みを下さる。それを大事にめいめいのカバンに入れる。カバンには、このお弁当の包みのほかに、ゆうべパパが作って下さった釣りの仕掛けが入っている。

「さあ、行ってらっしゃい。今日は、武一と王次が、ベコとジローを別々の舟で連れてってくれるのよ。嬉しいでしょう？ 舟の中であんまりはしゃいじゃ駄目よ。ジロー、手拭いを忘れないようにネ。さあ、行ってらっしゃい。今日は競争よ。両方とも負けないようにネ」

競争なら、どっちかが負けるのに、ママったらときどきおかしいことをいう。だけど、ボクはママが大好きだ。

パパも好きだが、パパは怖い。釣りや、水泳や、乗馬や、いろんなことを教えて下さるのはいいが、すごく厳しい教え方で怖い。大磯で、はじめて水泳を教えて下さったときには、パパが自分で舟を漕いで、ボクを沖へつれて行って、

「さあ、泳いでみる。見ててやる」とおっしゃると、いきなりボクを海に突き落した。ボクは無茶苦茶に水を掻いた。水が鼻や、口からどんどん入ってきた。しばらくして、パパがボク

の腕をつかんで、舟の上へひっぱり上げて下さったが、とても苦しかった。

乗馬の稽古も恐かった。去年、ボクが学校(学習院初等科)に入ると、パパは、北海道産のノッコという小さい馬を買って下さった。そして、乗馬の稽古がはじまった。馬の口に長い綱をつけて、その綱の端を持ったパパが、お庭の真ん中に立ち、チッチッと舌を鳴らすと、馬が歩き出す。まん丸をつくって、何回でも廻る。またパパがチッチッとやると、今度は馳け出す。あッ、恐い、と思うと、中心がとれなくなって、落ちる。

「弱虫！ 恐がるから落ちるんだ！」と、パパがどなる。パパには、ボクが恐いと思ったのがすぐわかるとみえる。ボクがまた落っこちて、鼻血を出しても、この廻し馬が五十回すむまでは許して下さらない。

パパは、また、ときどきわけのわからないことで怒る。ある日、学校で、昼休みのあと、ボクの机をあけると、マッチ箱が一つ入っていた。おかしいなと思って、開けてみると、あッ、桜の毛虫の小さいのがいっぱいつまっている。ボクは青くなって、マッチ箱を放り出した。毛虫は机のなか一面にのたくりはじめた。

「誰がやったんだ！」と、ボクはどなった。血相変えてどなるボクのもの凄いの勢に、いままでガヤガヤ騒々しかった教室は、ピタッと静かになった。

「誰がやったんだ！」と、ボクはまたどなった。すると、二、三人が殿下の方を指して、「殿下、殿下」といった。(その組には宮様が一人いた)ボクが殿下をにらみつけると、殿下はニヤッ

と笑った。殿下は、ボクの一番嫌いなものが毛虫であることをよく知っていていらっしやる。ボクはカッとなった。ボクは殿下のところへ馳けて行って、

「殿下のバカ、殿下のバカ」と、となりながら、胸ぐらをつかんで、力一杯ゆさぶった。弱い殿下は、机が倒れるのといっしょに倒れて、大きな音を立てた。そこへ先生が入っていらっしやった。そして、わけのわからないことが起った。ボクは、次の授業中、教室の隅に立たされたのだ。

家に帰ると、パパと、ママに、このわけのわからない出来事を話した。すると、パパは、いきなり、

「バカッ！」と、怒って、ボクをなぐった。

「パパ、子供同士のことですもの……」とママが取りなすと、パパはまた怒って、

「そんな、甘やかすからいけない」と、ママにも雷が落ちた。

パパは、ときどきこういう風にわからず屋のことがあって困る。

舟着きへ馳けていくと、武一あに、いも、王次あに、いも、もうちゃんと来ていて、二そうの舟で待っていた。釣り竿もちゃんと二本ずつ舟の中に寝かせてある。

ボクは、山に囲まれた、この丸沼が大好きだ。丸沼は、日光の湯本から金精峠を越えた下にある菅沼のもう一つ奥にある湖水だ。丸沼にはマスがたくさんいる。マスには、からだの真ん

中を縦に紅い帯がうすく通っているニジマスや、小さい、紅い点々があつて、とてもきれいなカワマスや、茶いろの大きな点々のあるブラウンマス、それから、釣り上げて日にあたると銀いろに光るヒメマスがいる。ボクが釣りに行くのは、このヒメマスだ。もっと巧くなったら、ニジマスや、カワマスを釣りに、連れて行ってあげよう、と、パパはおっしゃる。でも、ボクはヒメマスでも釣れば、とてもうれしい。毎日、最初のヒメマスがボクの赤く染めたサシを突ツついて、浮きがピクンと動くと、ボクはゾクツとする。そして、浮きが引ッ込むのを、まだか、まだかと、息をつめて待っているあいだ、竿を持つ手がブルブルとふるえてくる。

武一あにいは、舟を漕ぐのも上手だし、ヒメマスの釣れるいい場所も知っているし、釣りもの凄くうまい。

「若さん」と武一あにいが呼ぶ。武一あにいは、はじめはボクのことを坊ッちゃんと呼んでいたが、「坊ッちゃんは、若さんと呼ばにゃあいけねえんだってな」といって、若さんと呼ぶことにした。

「若さん、そっち向いて釣ったら、お陽さんが真ッ正面で、まじッぽかんべ。さあ、こっち向いて釣るだ」武一あにいは、おかしい言葉だが、親切だ。

「まだ、まだ、まだッ、そら、早すぎるだ！ 浮きの頭が見えなくなるまで我慢するだ」

「そらッ！ こんだアかったぞォ。糸をつかんで！ 竿を置くだ！ 糸をたぐるだ！ おや？ いけえぞォ！ ニジかな？ ゆっくりナヤすだ！ さ、たぐるだ！」

武一あにいのいう通り、ニジだった。ニジの二年子が武一あにいの手網にすくいあげられた。ボクは汗びっしょりで、心臓がドキドキだった。

「お昼にすべえよ」ボクもお腹がすいたところだった。ママが下さった紙包みには、いつもの通り、ボクの大好きなパンと、チーズと、板チョコが入っていた。武一あにいは大きなおむすびを頬ばっている。パンを噛みながら、舟のいけすをのぞいてみると、数えきれないヒメマス、それに、ニジマスが三匹、スイスイと泳いでいる。ジローはどうしたかしら？　こんなにたくさん獲ものがあつたかしら？　ジローと王次あにいの舟は、湖水のずっと向うの方にいる。パタちは、今日は川へいらしたらしい。パパの舟は流れ出しの葦ばえにつないである。

いま、あの頃のことを懐かしく思い出す。戦場ガ原を豆腐屋ラッパの乗合馬車で行き、湯本から馬で金精峠を越え、菅沼の左側を通って、八丁滝を下りると、丸沼の鱒釣りクラブへ着くのだった。

鱒釣りクラブは、父の仲間のアングラーたちのクラブだった。メンバーは殆んどが洋行帰りの殿様たち、旦那様たちだった。つまり、華族の御曹子たちや、錚々たる実業家の若旦那たちであった。

明治が終って、大正となり、明治天皇の後を追って乃木將軍夫妻が自害してから一年余りたった頃のことである。僕の長い釣りの編歴がはじまったのはこの頃である。

2

スコットランドのグリルス釣り

ロンドンから大^{グレート・ノーザン・レールウェイ}北部鉄道の特急に乗ったのが、オックスフォード大学の夏休がはじまった直後の七月上旬だった。あまりクサクサしたので、さいはての国、スコットランドはサザランド州までのすことになったのである。もちろんマス釣り用の毛鉤竿を携えてのことである。

一九二八年、オックスフォード大学の第一学年を了えたときである。

オックスフォード大学には、当時の英国の植民地、即ちインド、ビルマ、マレイ、アラビヤ各地、アフリカ各地から、少くない留学生が来ていた。官費留学生で、卒業のうへは、故郷に錦を飾って、それぞれ大英帝国の植民地政庁の役人になる予定の秀才たちである。その連中が毎晩といていいほど、カレッジの僕の部屋に集ってくるのだった。そして、エール（英国のビール（一種）を飲んで喧々囂々の議論である。「本国」である英国にたいして、満腔の敬意と憧がれをもって、やってきた若者たちの多くは、やがて、やりきれない不満をいだきはじめる。英国人たちの生活をわが眼で見れば見るほど、その植民地である故郷の大衆の搾取された、惨めな生活が身にしみて考え直されるのである。そして、アジアでのほとんど唯一の植民地でない日本、欧米諸国に堂々と伍している日本——こういう日本に大きな期待を寄せればこそ、僕の部屋にきては、大英帝国反対の激論に、夜のふけるのも忘れる次第である。

ところが、急に、その常連の集りが眼にみえて減りだした。ことに、優秀な連中ほど来なく

なった。まず中国の学生が、パツタリと来なくなり、それに右へならえするように、皆の来が少くなつたのである。僕は不審に堪えかねて、中国の友人を訪ねた。

「どうしたんだ？ どうしてみんな来なくなつたんだ？ 淋しいじゃないか」

僕の質問に、中国の友人は冷やかに答えるのだった――

「第二次、第三次の山東出兵を君はどう思うかね？ アジアの国日本は、欧米帝国主義といふしよになつて、俺たちの祖国をこれ以上しぼろうというのかね？」

その通り、一九二八年は、田中内閣の愚かしい第二次、第三次の山東出兵の年であるとともに、三・一五事件で知られている日本共産党大検挙、改正治安維持法施行、全国に特高警察設置、大山郁夫の労働農民党結成、翌日禁止というあわただしい、後向きの年であつた。

僕は進歩的なアジア・アフリカの友人たちの、考えてみれば当然なボイコットにクサクサして、これが北への逃避行を促進することになつたのである。

「レアルグですよ。ここで降りるんですよ」と車掌が親切に教えてくれた。シン湖の南端にある寒村レアルグの駅に降り立つと、トーマス・クック旅行社から連絡して貰つてあつたので、郵便馬車が待っていてくれた。これに便乗して約五十キロ、アシント湖畔のインチュナダンフ・ホテルに向うのである。

いささか余談にわたるが、シン湖はその頃ジャーナリズムの寵児であつた。日頃、君子は怪

力乱神を語らずという孔子さまのお弟子のような紳士面^{つら}をしている新聞ロンドン・タイムズまでが、シン湖の怪物について大きく報道していた。ギザギザのある背を出して、長さ二、三十メートルもある怪物がシン湖を泳ぎまわるというのである。ジュラ紀、白堊紀に棲んだ恐竜の一種だろうということだったが、大さわぎの末、真相はとうとう知れずじまいだった。とにかく、その頃のシン湖は弥次馬客と、報道陣とでひしめきあっていた。

アシント湖畔までの五十キロは、大変な石ころ道で、スコットランドの名山の一つであるベシ・モア^{ベシ}の麓をまわり、八時間あまりかかって、やっとインチュナダンプ・ホテルにいた頃は、すでに陽はとつぷりと暮れていた。

ホテルはまったく旧式の、おちついた、釣り宿であつた。ペコペコの腹に、天下一品の鱒のバター焼の夕食をすませて、ホテルのバーに行つてみると、本場のスコッチ・ウィスキーにゴキゲンの釣り天狗どもが、いまや釣り談議のたけなわである。

「わしゃアね、アレックの野郎の自慢が癪だから、こゝ畜生と思つてねばつたよ。ほんとにねばつたんだ。アレックの八ポンドのグリルスが何でえ。グリルスにゃア十五ポンドの奴だつてあるんだ。八ポンドの奴なンか、チンピラだアな。俺アねばつたぞ。そして、どうでえ、飛んでもねえ化けものオ引っかけた。強エのなンのッて！ 竿が折れるか、糸が切れるか、鉤が伸びるか、俺が水中エ引っ張りこまれるッかってほどの化け物よ。足もとまで寄せるのに、